【別冊第3号】 2016.4.30発行

DRAMA かながわ 別冊5号

神奈川県演劇連盟合同公演

「長くつ下のピッピ」 YAP 原作:アスドリッド・リンドグレーン 脚本・演出:立花里見

2016年2月27、28日 神奈川県立青少年センター ホール

文：YAP 高橋和生

今年度、YAP（青少年芸術・文化プロモート協会）が担当させて頂いた、神奈川県演劇連盟の合同公演は、2月28日（土）29（日）の二日間、計4回の公演をもって、無事に幕を下ろすことが出来ました。

神奈川演劇連盟の合同公演という、大きなプロジェクトを始めて担当させて頂き、沢山の方々との交流が出来た素晴らしい舞台となりました。また、至らない我々を事前の準備・当日の舞台設営・受付など、多岐にわたり御指導・ご協力頂いた連盟の皆様には、この場を借りて厚くお礼を申し上げます。

今年度の合同公演を振り返りますと、本当にこういった企画ならではの初めてづくしの公演でした。公演会場となった神奈川県立青少年センターのホールは、我々が今までに公演を行ってきた劇場よりもはるかに舞台が広く、客席に関しては3倍以上もありました。この大きな舞台で、どれだけ沢山の方々に今まで以上の感動を伝えられる舞台を作り上げるのか、これが合同公演の大変な部分でもあり、素晴らしい部分でもあると感じました。

沢山の方々に参加して頂ければ、よりグレードアップした舞台を作り上げることが可能となり、集客面でも期待が望めるからです。広い舞台は、考え方を変えると、その広さでしか出来ないことが出来るようになるとも言えます。今回の合同公演を担当させて頂いたことで、このような今まででは体験できなかったスケールでの舞台作りを経験させて頂きました。

我々が作る芝居は、子供たちが中心のミュージカルで、舞台に立った経験の無い子供でも、芝居を楽しんで共に成長してもらえることを目的としています。芝居を通じて年齢の異なる仲間と共に同じ目標に向かって切磋琢磨することは、人間として成長することに繋がると考えているからであります。

しかし、子供たち中心のミュージカルといえども、芝居経験がある大人の役者の方々の力なしには、お客様を満足させるものは中々作り上げられません。今回はそういった面で、演劇連盟の方々が力を貸して頂いたことで、よりパワフルな舞台を作り上げることが出来ました。稽古中は真剣に取り組む子供たちも、休憩時間になると走り回って遊びだします。普段、大人の役者だけの環境で芝居を作っている方には、そこを理解して頂けるかが不安でありましたが、稽古が進むにつれて、子供たちと楽しそうに話し、遊んでくれている姿を見てとても安心しました。

合同公演という企画は、神奈川で個々で活動している団体が集って一つの舞台を作り上げる、演劇連盟ならではの素晴らしい企画だと思います。しかし、もっと多くの方々と共に作り上げることが出来たら、そう思ってしまうことも、今回の公演を担当して良かったと思えるからこその願望だと感じています。またいつこのような素晴らしい企画を担当できるかは分かりませんが、今回の公演で学んだ経験や反省を、今後の我々の芝居作りに、また、演劇連盟としての芝居作りに活かしていきたいと思います。

YAP

「長くつ下のピッピ」

原作:アスドリッド・リンドグレーン　脚本・演出:立花里見

２０１６年2月２７日、２８日　神奈川県立青少年センター ホール

スウェーデンの児童文学作家アストリッド・リンドグレーンの代表作「長くつ下のピッピ」は全世界で愛読されている作品であるけれど、正直大人目線で読むとピッピはなかなか「やっかいな子ども」である。いわゆる自由奔放なピッピがもし身の回りにいたらどれほど手を焼くだろう。しかし舞台の上のピッピの自由奔放さはどうだ。少々厄介なまでの破天荒はその明るさからか周りがどんどんピッピ色に染まってゆくではないか。

今回のＹＡＰの公演は神奈川県演劇連盟合同公演「ドリームミュージカル２０１６」としてほとんどが公募で募った参加型ミュージカルということで、舞台の上にはベテランから初舞台の役者まで幅広い年齢層が集っていた。ストーリーの大部分が子どもたちで構成されている。これには感心するばかり。メインキャストはミュージカル「アニー」のアニー役や「レ・ミゼラブル」でリトルコゼット役を演じた姉妹など実力派の子役さんたちのWキャストということで、その芝居はさすがに自信に満ちて堂々たるもの。

一般参加の子どもたちもレベルが高い。大人の役者たちがガッツリ固めた脇がこれまた子どもたちにいい影響を与えたのだろう。なかなかの完成度である。

会場内の子どもたちの晴れ舞台を目を細めて見守るご家族のみなさんの存在も大事である。子どもたちは安心して晴れやかな顔で生き生きと演じることが出来る。なかには３歳くらいではないかと思われる小さな役者さんの姿も。これはもう反則だ(笑)とてつもなく愛らしくほほえまし過ぎだ(*≧∀≦*)

強いて書かせていただくと、このミュージカルは子ども向けなのか大人向けなのか？という疑問だ。小学生でも楽しめる物語だけど子ども向けとしたら少々長いような気がする。では大人に向けた児童ミュージカルだとしたら胸に響くストーリーとは言い難い。誰ひとり知る人が出演しているわけではないので「芝居」を見に行った者としては展開のスピードやドラマは若干物足りない。しかしあくまでも児童文学なのだ。そこを差し引いてもキャスト全員あっぱれ！個性あふれる大人の役者たちも舞台を楽しんでいるのが伝わってきたし、出演者たちの更なる成長が楽しみである。ピッピの連れているチンパンジー「ニルソンくん」のキャラをポケットに入れて持ち帰りたいなぁと青少年センターから紅葉坂をニヤニヤしながら駅に向かった。

劇団こゆるぎ座　保乃しんり

まりこ☆みゅーじあむ

「おはなしころころ」

構成・脚色・演出:川井眞理子

２０１５年8月２９日　於：横浜にぎわい座 のげシャーレ

入場した途端目にしたのは、幼稚園入園前の子供とその親が当然（自然）に階段状客席前面にしつらえられている桟敷席に喜々として坐る姿だ！そして開演「そうだ村の村長さんさん」と早口言葉をこれも当然の様に口にする。皆常連なんだ！

三つの民話が始まった、これをもう少しアイデァを盛りこんで丁寧に創り上げれば、大人の鑑賞にも耐えられると思う。「ももたろう」の中での鬼ヶ島からの戦利品の宝物造りを芝居を２０分中断して様々な材料を使い子供達に製作させる。子供達が積極的に素晴らしい感性で仕上げていく、大人は手持ち無沙汰かと思ったらそうではない、宝物を作るための新聞紙を丸める為に借りだされる、子供達の熱気が下地にあるためか結構大人も乗って夢中になって造った。

同じ県連の仲間なのに、なかなかタイミングが合わずに観劇できなかった事を申し訳なく思う。心の何処かで子供向け！と思っていたのだと反省した。認識不足でした。子供達は将来の我々劇団の観客なのだ、今から芝居を観る目と態度を養っている。まりこ☆みゅーじあむさんには期待大！こんなに子供達がおとなしく観て、積極的に参加するという事は、これまで長い間コツコツと積み上げてきた地道な努力の継続の結果だと思う。

しかし今回の一番の功労者は緩急自在に弾き選曲もピッタリと子供の心を良くとらえていた、キーボード奏者であった！皆さんも是非一度は観て、子供心に戻って感じるべき舞台だとおすすめする！

劇団よこはま壱座　勝碕若子

緑慎一郎とミユキーズ

「初夜と蓮根」

脚本:土田英生　演出:濱田重行

2015年9月11日～13日　於：神奈川県立青少年センター 多目的プラザ

会場に入ると目に入ってくるのは、一軒家のリビングのセット。演出の濱田氏の舞台セットはいつも立派で、憧れの念を抱く。緞帳があがるワクワクも素敵だ

が、開場中からセットが見えて、「これからこの空間でどんな物語が展開されるのだろう」と思わせてくれるのも、舞台装置のいいところであり、自分が学習しなければいけない点だと感じます。

さて、会場が暗転し始まりました「初夜と蓮根」。もはやその風景すら、現代の家庭では稀有なものになってしまった、食事の度に全員食卓に集い団欒する、幸せそうな家族の話。

蓮根は、その名の通り蓮の根っこだ。泥の中にいて見ることはできず、美しい蓮の花だけが見える。蓮根は服を着ていない。丸裸のようにつるつるだ。蓮根には穴がある。そう。中身は意外と空洞なのだ。

大阪城は建てなおされた偽物だという引きこもりの長男の話は、リフォームしたばかりのこの家のことをそのまま射ている。初夜を迎えたことのない夫婦。性豪のフリをする父親。不倫をした母親。結婚を控えた長女は、一見人良さそうだがどこか胡散臭い婚約者の、隠していた本質を見抜けなかった。頻繁に家にやってくる、特異な恰好の長男の友達がどんな人なのか、家族は誰も知らない。その特異な恰好をしていた彼女は、その見た目に寄らず、実は意外と真面目な人だった。

全てが本質に蓋をして体裁だけを整えている。もしくは、見た目に囚われ中身を蔑ろにしている。見た目と中身、本質と体裁、本物と偽物について、この作品はひたすらに問いかけてきた。そしてそれは冒頭の家族での食事のシーンで全て物語られていたと思う。先に「幸せそうな家族」と書いたが、テーブルを囲んだ４人は、「幸せな」でもなく、「歪な」でもなく、きちんと「幸せそう」な家族であった。「幸せ」「良い家族」で片付けられない違和感を感じ、その後に語られるエピソードやアクシデントを経て、「あぁ、最初の感覚はそういうことだったのか」と思わされた。

また、もうひとつのテーマとして挙げられるであろう、性に関しても書きたいのだが、書き出すときっと止まらなくなってしまうので、ここでは書かずにいようと思うが、愛と性については、語り尽くせぬほど考えを巡らした。

そしてこのような若干ディープな内容にも関わらず、あまりシリアスにならず、どちらかと言えばコミカルに楽しませて見せてくれたのは、頻繁に客席から笑い声が響いたことからもわかるだろう。

虹の素　熊手竜久馬

劇団やぶさか

「千夜一夜物語 アルフ・ライラ・ワ・ライラ～カマル王子とブドゥール姫～」

作・演出　海老原あい

２０１５年９月２５日～２７日　於：BankART Studio NYK

実は、劇団やぶさかの舞台を観るのは初めてだった。劇を観る前にインターネット等であえて調べずに観に来た。パンフレットだけを見て思ったのが若い女性の劇団で結成してから１５年経っている。今回私が観る劇が一夜限りのシャッフルキャストという事だった。

しかし当日頂いた15年間の公演の歴史の資料に目を通すと数々の公演の写真に驚く。衣装の完成度も高いが女性が男性の格好をした写真が目立つ。立ち姿がとても様になっている。今回も女性が男性の格好して登場するのだろうかと期待した。

開始直後、素敵なアラビアン衣装をまとった女性達が登場する。とても色っぽく頭の飾りやネックレスやイヤリングを見てもこだわりを感じる。一人一人の衣装もその個性が生かしてあり、そしてその衣装や装飾を身に付けた姿のアラビア風な振り付けは独特な雰囲気を感じさせる。

そしてパンフレットを見た時も驚いたが登場人物に男性の格好をした女性が出てくる。思った以上に格好良い。というかすごく格好良い。気付いたら目で追っていた。特にアクションシーンがすばらしい。真っ黒の謎の刺客に何度も襲われるがその度にハラハラする。謎の刺客が舞台に現れる度に舞台の雰囲気がガラリと変わる。数人で突然登場するので迫力があり動きもすばやい。そして謎の刺客に対して素早く動く主人公にまたまた格好良いと思ってしまった。男役を演じるのに目の動きや表情、台詞の言い方、動作等とても自然である。いろんな困難が待ち受けている話の中で、次々とキーワードが出てくる。その時にフっと考えている表情やニヤリと笑った表情、友達を思いやる友情シーン、最後の最後まで目が離せなかった。

冒険の最中に空を飛ぶシーンが出てくる。舞台の後ろで長い布がユラユラ揺れている様子は、まるで風がなびいている情景を想像させる。次から次へと場面の転換があり「この後どうなるのだろう」といつもハラハラさせた。

ただ今回の劇はカタカナ単語の台詞が多い為、登場人物や石の名前等も早口であると聞き取りにくい箇所もあった。

旅の冒険の話はいろんな登場人物が出てくる。それぞれ様々な個性があり、台詞のボケと突っ込みがとても面白い。何度も笑ってしまうシーンの中、シリアスなシーンでもユーモアを忘れないところが観ていてとても楽しかった。

個性豊かな登場人物による冒険の話はアッという間に時間が過ぎてしまった。一夜限りのシャッフルとの事だが、是非とも通常キャストでも観たかったと思った。

劇団横綱チュチュ　伊藤伊咲代

studio salt

「蒼」

作・演出：椎名泉水　２０１５年１０月２２日～２５日

於：神奈川県立青少年センター 多目的プラザ

同じ世代に生まれてよかった。今回のスタジオソルトの「蒼」を観劇してそう思った。

なぜなら、開場中の曲の選択から芝居の中で登場する風船おじさんの話し等はおそらく僕が１０代だったりしたら後で調べないとわからないことだったであろう。そういう意味で中学生時代の自分と大人になった自分を登場人物の時間軸に重ね合わせて観劇させてもらった。少しづつ芝居を思い出してみる。劇場に入って見える景色は白と夥しい新聞紙で今回はいつもと舞台美術が違う感じに新しいことが始まるのかとわくわくさせる。

開演すると高校時代の二人のテツヤから始まる…のだが演じるのは後々４０代になるおじさん二人。まさかこのまま高校生で話しが進んだりしないよな？と、少し不安になったりしたが、舞台はそれでいいと思う。演じる人間が猫だと言えば猫だし、五歳児だと言えば五歳児になれる。

話しを戻すとこの冒頭部分は後半にもう一度現れるのだが、どちらが正解なのかは教えてくれない。それは僕が考えることなのかもしれない。高校生から中年へと時代が飛ぶと一人のテツヤは寝たきりになっていた。チラシにある「失った俺の青」とはこの事だった。長い年月、意識がなかったテツヤが目覚めると昔の恋人、家族、友達、様々な環境が変わっていた。テツヤは失った時間を理解していくなか過去に落とし前をつけることを決意する。

とても重いテーマの中に役者の面々が様々な角度から感情を添えていく。決して急がず、ゆっくりと、感情を前へと進めていく。大人になることとは何なのか？僕はまだ子供なのかもしれない。そんな事を思わせてくれるとても素敵な時間だった。

演劇プロデュース『螺旋階段』　緑慎一郎

劇団こゆるぎ座

「小田原藩治水録 荻窪用水記」

作：後藤翔如 演出：楠田正宏

2015年10月31日、11月1日　於：小田原市民会館大ホール

今年、創立７０周年を迎えた劇団こゆるぎ座公演「小田原藩治水録　荻窪用水記」（後藤翔如作）を観た。

昭和２１年１月創立、県下で最古の歴史を誇る神奈川のアマチュア演劇伝統を伝える劇団の一つである。

「小田原藩治水録　荻窪用水記」は江戸時代、水利に恵まれなかったために水田耕作ができなかった荻窪ほか五ヶ村の共同事業として始められた治水工事で、１７８２年（天明２年）～１８０２年の２０年間にわたり、工事中犠牲者をだしながら幾多の困難を乗り越えてリーダー川口広蔵のもと荻窪用水を完成させた農民たちの叙事詩的な舞台であった。

荻窪用水は箱根湯本の早川で取水、小田原市入生田、風祭、板橋、水之尾を経て小田原駅西口近くの荻窪に至る１０．７kmの用水路である。

劇中の主人公広蔵は山北の百姓であったが副業で大工職をやっていたこと、測量の技術をもっていたことから頭領として工事を差配した。広蔵にとって他村の荻窪村への疎水工事を天命と考え私財を投入して進めた。

現在、車で箱根湯本から小田原駅の間は一走りの区間であるが、工事は途中岩盤に突き当たるなど困難を極めた。現在も荻窪地区では彼岸に「広蔵念仏」を唱える習慣があるという。

こゆるぎ座の７０年の歴史には幾多の困難を乗り越えてきたと考えられるが、１９９０年に郷土小田原の歴史に取材した戯曲「新筋違心中」をこの劇団に提供した後藤翔如との出会いが、この劇団が郷土に取材するドラマを連続上演する決意をさせ後藤を座付作者にした。後藤の死去のあともこれは変わらない。

小田原の市民にとって秋の１日、こゆるぎ座の芝居を観ることが楽しみになっていて満員の観客が詰めかける。アマチュア演劇の典型的なありかたがここにあると思う。こゆるぎ座の舞台は市民にとっての文化財であり、伝統芸能であるとみた。劇団こゆるぎ座がこのあとも永く市民に愛される劇団として活躍されることを祈念したい。

横浜小劇場　荒井賢一

劇団蒼い群

「病は気から」

作：モリエール 演出：福本幸男

2015年11月7日、8日　於：横須賀市立青少年会館ホール

健康な人間が「自分は病気だ！！」と言い張るお話。小学校の頃、「死の病に侵されているんだ！」とかっこよく言ってみたかった。あるわけないから言わなかったけど、小さな変な願望。結構誰にでも記憶にあるんじゃないかなと思う。でもいざ熱出して学校休むと、心配してもらって嬉しい反面、凄く申し訳ない気持ちになって、明日は絶対行かなきゃと思う。「自分は病気だ！」と子供みたいに言い張るお父さんに、何だか自分の小さい頃を重ねてしまった。

この作品は、「自分は病気なんだ！」と思い込んだ男をターゲットにお金が欲しい人たちが集まってくる。医者がいらない薬を処方して大金をだまし取る。男は医者が傍にいないと心配だからと、ついに娘を医者の息子の嫁にやろうとする。（財産を持って行かれそうになっている。）本当に心配している娘や周りが必死に、「お父さんは病気

じゃない！」と訴える。最終的には、娘の彼氏が上手に言いくるめて、終わる。その終わり方も、「健康な人に薬を飲ませてればいいんなら誰でも医者になれるんだから、お義父さんが医者になればいい。」という皮肉めいた内容。当時の社会風刺色強いコメディー作品。

現代はどうだろうか。いい病院もある一方で、あげなくていい量の薬を飲ませて薬漬けにしてどんどん病気にしていく病院ってあるよね。「自分は病気だ！」と言いたくなって、「病気だ！」って言ったら、周りが「そうですね病気ですね。」と薬を処方してきて、「あ、そうなのかも。」と思って飲んでたらホントに病気になっちゃった。この作品に出てくるお父さんも一歩間違えばそうなってたんだよね。いらない薬を欲しがってる姿は、薬依存にも見える。笑いに満ちていて楽しいけれど、実は現代にも通じるちょっと怖いコメディーだと思った。健康なら、素直にやっぱり、健康がいいね。　　ナオサク企画　秋直作

虹の素

「Lapis lazuli／PENGUIN」

作：熊手竜久馬、桜木想香　演出：熊手竜久馬

2015年11月13日～15日　於：神奈川県立青少年センター多目的プラザ

「Lapis lazuli」

１７歳の頃の初恋を心に秘めたまま、その当時の自分と重なるような１７歳の少年に絵を教えている３４歳の男。海辺の小さな町に住む二人の元に、とある家族が引っ越してきたことで、急速に変わる日常。少年と男、まるで過去の自分とも、未来の自分ともとれる二人の関係性が、二人の恋愛を同時に進行させることで、過去・現在・未来について印象的に描かれていた。特に印象的だったのが、１７歳の恋と３４歳の恋の温度の違い。若さゆえに情熱的な少年と、大人ゆえに情熱を押さえる男。その二人の些細なやりとりだ。当時１７歳でこの話を書いた時に、周りの大人が「なぜ１７歳で書けるのか」と驚いたということが理解できた。

１７歳の恋の話を、１７歳の人間が描くことは理解できるが、では、３４歳の恋の話を、１７歳の人間がなぜ書けるのか。考察すると、この物語は、誰もが思い憧れる理想的な美しい恋愛と、現実に経験する恋愛の苦い部分が、ギリギリのバランスを保って存在しているからなのではないだろうか。まだ３４歳の恋愛が分からない観客も、もう３４歳の恋愛を経験した観客も、経験したであろう１７歳の少年の姿に感情移入するからこそ、３４歳の恋愛に理解や共感を抱くことができる、物語であった。

「PENGUIN」

「Lapis lazuli」に登場する男の、１７年前の物語。先にその後の話を観た後でこの物語を見ると、同じ１７歳の頃の恋愛を描いているのだが、登場人物も同じ役者が演じていることもあり、素直に物語に入り込むことができた。

個人的な感想を述べると、役者陣の経験値や物語の厚みなど、異なる演目をセットで観劇するとどうしても比べてしまうという点が少し残念であった。

若手主体の、それを活かした構成は十分に楽しめたが、だからこそ、「PENGUIN」と「Lapis lazuli」、二つの物語が融合した構成で観てみたかったという印象が残る。敢えて言えば、この物語が「Lapis lazuli」の回想という枠組みからあと一歩脱却しきれなかったからではないだろうか。

とはいえ、こうして苦言のような形で書いているのは、両作が交わった時により一層の感動や感情を抱かせてくれるのではないかという期待が元にあるからである。観客にそう思わせるだけでも、この公演は十分に素晴らしいものであった。　　ＹＡＰ 高橋和生

劇団かに座

「ら抜きの殺意」

作：永井愛　演出：馬場秀彦

2015年11月13日～15日　於：関内ホール・小ホール

創立６５周年をむかえた直後の新たな旅立ちの公演として位置づけられた今回の公演「ら抜きの殺意」を初日に観劇することが出来た。戦後間もなく発足した「劇団かに座」は激動を続ける６５年の歴史を主宰田辺晴通氏が牽引してこられた。その役割を今回の公演から次世代へと「バトンタッチ」する公演だという。その意味でも記念すべき公演であり、特筆すべきことなのではないか。

創立の主旨を貫きながら次への世代に襷を渡すことは容易なことではない。劇団とは一代で終わるものであるという「劇団一代論」が主流だからである。京浜協同劇団もその課題を克服すべきなのだが未来が開けている訳ではない。

そんな思いを持ちながら関内小ホールに足を運んだ。成る程、平日の夜だというのにホールはかなりの入り具合、かに座ファンも同じような思いなのかと推測してしまう。

演目は衆知の永井愛さんの名作である。五年前に上演しているので再演という事になるが、作品世界は記念すべき公演にふさわしく、日本語の混乱の底に透けて見える日本社会の混迷というメッセージ性、日本語の混乱を際だたせる

ための台詞のやり取りの明確さが要求されるという、演じる役者にとっては大変な課題となるその挑戦性、そして二時間半あまりを舞台にひきつけなければならないという演出の手腕が問われるなど、ドラマ上演上の重要な要素がぎっしりと詰まった演目だからである。

「ら抜き」をめぐってついに殺意を抱くまでに至るドラマの対立と葛藤を担う海老名（小林一雄さん）と伴（金野克行さん）がその役割を果たし好演、見ごたえのある舞台づくりに貢献していた。山元さん、金谷陽子さん、中村俊夫さんなど脇を固めるベテラン陣も楽しみながら役を創っている様子が伺え何故か嬉しい気分にさせられる。観客と舞台が身近な距離にある地域演劇の醍醐味のひとつなのかも知れない。

混乱する作品世界を意識してか舞台装置も雑然、狭い空間を二階建て構造にしての活用は成る程。休憩なしの上演、場面転換時間の短縮等テンポ感はもっと欲しかったか。

今後へ向けた「かに座」の決意と気概は充分に伝わってきた公演であった。　京浜協同劇団　藤井康雄

劇団横綱チュチュ

「みなもさす」

作：菱倉あゆみ　演出：団のぼる

2015年11月21日、22日　於：横浜市磯子区民文化センター 杉田劇場

予定を立てるのが遅いのが悪いのだが、観に行こうかな、と思うと既に満席…と言うことが多く、久しぶりに横綱チュチュの公演を観た。

まず、音響卓に袴姿の女性が座っている、と思ったら１ベルの後、やおら立ち上がり前説をする。開演するとキーボードとクラリネット（ですか？）の生演奏プラス効果音の音響オペ、たぶん作曲もされているのだろうから一人４役。すごい！

海辺の、水仙が群生する中にある小さな民宿「水仙荘」を切り盛りする８７歳の女将。お正月直前、さまざまな事情を抱えてやってくる人たちの群像劇。

民宿の新人バイトの女の子、思い出の場所に旅に来た母娘、民宿を買い取ってペンションを始めるつもりの年配の夫婦や、女将に励まされたり毒舌を吐いたりしながら民宿に出入りしている作家たちや、魚や調味料を届けに来る業者とその子ども達、そして女将の娘と孫。８７歳の女将は台所で怪我をしたのをきっかけに、認知症ではないかと思われるような症状が手始める。登場人物たちそれぞれが本当は思いやりを持っているのに、どこかすれ違ってしまったり、うまく表現できなかったりして、ケンカになったり気まずくなったりしてしまう。

チュチュのメンバーは私と年代が近いので、年老いていく親への気持ち、自分自身のこれからへの不安、たぶん同じような思いを抱えているのではないかと思う。でも、いろんなトラブルや行き違いがあっても、親子はずっと親子だし、夫婦は支えあって、友達はきっと助けてくれるし、そうして乗り越えていけるんじゃないかと思わせてくれる終わり方だった。もちろん、現実はもっと厳しいのかもしれないけれど。

会話するよりスマホを見る今の風潮への批判もちらり。本物の獅子舞も見事だった。ベテランの劇団員たちは安心して観ていられるし、子どもたちの芝居も達者で、毒舌オネエキャラも今風で楽しかった。

横綱チュチュは、地域に根差した活動を続けていて、ＳＮＳなど駆使しなくても杉田劇場を満席にしてしまう。しかも低料金だ。客席には子どもも多いが、本公演は子ども向けに創られてはいない。前説で「お子さんが泣いたりぐずったりした時は、勇気をもって席を立ってください。ロビーにモニターもあります。落ち着いたら戻ってきてください。」と言うのもチュチュらしい。でも、ほとんどの子どもが集中して観ている。

どの役者がうまくないとか、そんなことはどうでもいいと思わせるほど、誠実に丁寧に芝居を創っているのがわかる。あたたかくて静かに感動する。

カーテンコールで安次嶺さんが「たくさんのお客様に来ていただいて」と涙ぐんでいて、もらい泣きしそうになってしまった。　岡本みゆき

演劇プロデュース『螺旋階段』

「演歌の畦道」

作・演出：GREEN

2015年11月21日、22日　於：小田原市生涯学習センターけやき　ホール

秋も深まりつつあるこの季節に、小田原へ観劇に行くのは、ちょっとした小旅行気分だった。しかし、小田原駅に到着すると、土地勘がなかった為、なかなか会場にたどり着かない。

相当な幹線道路を歩いてようやく市庁舎等の大きな建物の並ぶ中に見つけて入る。と、体育館のような広い空間の会場だった。ステージの前には、出入り口あたり迄パイプ椅子が相当並んでいたが、開演する頃には客席はほとんど埋まっていた。まず地域の方達が、このような会場に大勢集まる事に驚いた。そして、「演歌の畦道」というタイトル。「演歌の花道」というＴＶ番組のタイトルをもじった事を当日パンフレットに明記されていたが、「畦道」とは、また面白い。

そんな事を考えているうちに開演すると、舞台は缶詰で一杯飲む事も出来る酒屋、そして路地を挟んだお隣さんの家のセット。近所の人が何となく集まってくるこのお店。何だかほのぼのと感じ、体育館のような会場の事は忘れて芝居に魅入っていた。

両親を亡くした兄と妹が酒屋を切り盛りしていたが、お年頃の妹は「芸能人になる」と家を飛び出していった。それから５年がたち、兄妹は其々の生活になってしまったが、兄の店の前ではあいも変わらず常連さんが缶詰で一杯やっている。そんな「日常」へ、妹のマネージャーと名乗るモノが現れ騒動が始まる。全体的にテンポもよく、このほのぼのとした話にぐいぐい入っていけたのだが、夜更けの幽霊騒動のシーンはちょっと長く、流れを止めてしまった感じがあり、惜しい。

そして、毎回お馴染の田代さんよる「唄」が唄われる。勿論、演歌だ！これは演出家のこだわり？かと思われるが、「待ってました～」と思う方も多いのだろうか。

兄のもとへ戻ってきた妹がラストで唄う。この唄がまたうまい！ので盛り上がるラスト～それに続く一言「ただいま」で、照明が落ち、あの眩しいステージの幕がおりる。あたりまえの言葉なのに耳に残る。登場人物の人柄（其々の個性はあるが）も、兄弟の思いも、そして展開も、どこにでもあるような風景である事が、かえって、すんなりとこちらに伝わってくる。だから、心地よい。

「螺旋階段」の舞台をいくつか観てきたが、こんな人情モノが、本当は一番似合っているのではと、思うのは自分だけだろうか。小田原駅からこの会場に辿り着く迄の道のりは長かったが、芝居を十分楽しめた帰路は足取りも軽い。「螺旋階段」の次回の芝居、楽しみである。

まりこ☆みゅーじあむ　川井眞理子

京浜協同劇団

「ブラック・カフェ　―日本の恐怖と貧困―」

作：集団創作　総合演出：藤井康雄

2015年11月27日～29日、12月4日～6日、11日～13日　於：スペース京浜

久し振りにスペース京浜に伺った。客席は舞台を三方向から観劇できる造りとなっている。月を跨いでの十日間の公演、私が観劇したのは最終日の前日だが客席は満席に近く、地域から愛されている様子が実感できました。さて、今回は、オムニバス形式による作品、国会議事堂下の地中に住むモグラ（モグ兵衛）と大震災後福島から上京して来たモグラ（グラ之助）、地中に居るだけに国政の裏の会話も聞こえるのでしょう。《耳を澄ませば》《ブラックカフェへようこそ 》《日新町ゴジバ》《生活相談室》《最後の授業》《レンタルショップ》以上の６作品である。どれを取っても我々の身近にある問題を実に解り易くブラックユーモアで纏めている。今６作品の中で私は、《日新町ゴジバ》《生活相談室》《最後の授業》が印象的でした。

《日新町ゴジバ》、平成２７年５月１７日に川崎区日新町で実際に起きた簡易宿泊所火災、居住者は生活保護をうけて生活している高齢者が殆どである。死亡者が７人とも１０人とも言われた悲惨な事故を《ゴジバ》が夫々の思いを語る。動きを止めず間合い善いテンポで進めており、更には死亡した中の１人、近く自立を目指していた４８歳の男性：酒井貴一を登場させた展開には感激しました。《生活相談室》では、生活保護の認定を受ける為に相談室を訪れた男性には、保護を受ける事に何の屈託も無い様子に対し、救うという使命感を持った相談員は面接時におけるノウハウを懇切丁寧に説明してゆくのだ。この両者の心情の表し方が決して深刻な部分を前に出すのではなく何とも面白い。この後、所長が登場し保護者を食いものにするキナ臭い展開となるのだ…。《最後の授業》では、定年退職を迎えた教師の最後の授業を校長が見守って（監視して）いる。授業の内容は憲法改正に伴い今後の解釈についてだ、生徒間のコンビネーションの善さが伝わってくる、テレビドラマの「金八先生」の授業風景を思い出させる。授業が終わり校長は教師を称え労い教師は校長に感謝の意を伝える。が、建前なのだ。帰宅し妻が勧める晩酌に銀八先生は苦痛な表情を浮かべる。

数十年の教育現場に於いて自分は、生徒に真の教育を施して来たのだろうか…。学校教育は、詰め込み教育からゆとり教育へと方針を変えた時期もあったが数年の内に廃止同然となっている。学習指導要領自体に是非が問われているのも事実だ。私は、この作品を観て、子供の頭にインプットするだけの教育ではなく、頭にスペースを作る教育が必要なのだと実感しました。

６作品、約２時間に亘り観客を飽きさせない笑いを提供してくれた演出であったと同時に、時の移り変わりの中で次第に正義感を無くし、活きた生活を失い、自尊心の欠落を生むであろう《恐怖と貧困》に警鐘を鳴らす作品であったと考えさせられました。因みに、タイトル「ブラックカフェー日本の恐怖と貧困ー」は、ファシズム体制下の恐怖や貧困を生きる人間の心理を描いたドイツの劇作家ブレヒトの名作「第三帝国の恐怖と貧困」にあやかって付けられたのだそうだ。

劇団かに座　馬場秀彦

劇団河童座

第224回公演「トマソン」　作：中西八洋　演出：横田和弘

2015年12月5日、6日　於：神奈川県立青少年センター 多目的プラザ
2015年12月19日、20日　於：横須賀市立青少年会館ホール

【トマソン】とは、不動産に付属し、無用の長物ながら鑑賞する者が在るために超芸術として存在している物。

劇団河童座第２２４回公演は、そんな芸術上の概念をタイトルにした作品だ。

作は河童座期待の若手、中西八洋さん。若手作家の作品を代表の横田和弘さんが演出した。

冒頭、トマソンとは何ぞや？という疑問をまずはオタク青年が登場しコミカルに説明してくれる。そこに続々登場するのがマドだとかカベだとか渾名のついた風変わりな面々。彼らの暮らすトマソンだらけの倉庫に一人の少女があらわれ、物語は動き出す。

変わり者だらけの閉鎖空間に普通の少女。さながらアリスのティーパーティーのよう。

トビラという正体不明の少年はふらっと現われて消えるチェシャ猫、他の面々は不思議の国の住人。現実世界にうんざりした少女が訪れた不思議な場所。不思議の国のアリスでは、アリスが夢から覚めて物語が終わるが、トマソンでは少女だけでなく住人たちも夢から覚める。あんなにあっさりと夢から覚めてしまえるのか？

観劇時には正直、腑に落ちなかった。が、今になって思う。覚める人は意外とあっさり覚めるのだ。あっさりと芝居や音楽をやめてしまえた友人たち。みんな幸せそうで元気にしている。

夢を見続けることが必ずしも幸せとは限らないのだ。物語の主人公は帰りたがる。アリスもドロシーもみんな、退屈な毎日に帰っていく。芝居だとか音楽だとかやめられず、いつまでも夢を見たいだなんて思っている私はトマソンのようなものなのだろう。それも鑑賞する者が在れば、だが。

魅力的な設定や伏線を活かしきれていない（こちらの理解力不足かもしれないが）部分もあったように感じたのだが、観劇後のなんとも言えない感覚が今になってじわじわ効いている。ぜひ、いつか再演していただきたい。

歴史ある劇団に吹いた新しい風。河童座の、若手×ベテランの強力なタッグに期待大だ。　　劇団やぶさか 中島玲奈

劇団よこはま壱座

「はみだし忠臣蔵～４７人のヤバイ義士たち～」

作: 中村俊夫　補作・演出: 濱田 重行

2015年12月18日～２０日　於：鶴見区民文化センター サルビアホール

幕があがる。プロセニアムの舞台をきれいに使い切る舞台美術。鶴見にあるサルビアホールでの観劇は初めての筆者であるが、冒頭から期待感を煽られることとなる。

よこはま壱座は髷物を年に一回は上演する劇団であるという。一朝一夕ではなしに身に付けられているものであることを感じさせる役者の所作は、それだけで美しい。若い劇団では中々挑みにくい作風をこなせてしまえるのはやはりそれだけの年輪を積み重ねてきているからなのだろうか。

ストーリーは、上演時期の１２月としては定番である、赤穂浪士四十七人の物語。通常であればそれは多大な緊張感と高揚感を感じさせる物語であり、創り手側もそれを意識して然るべきなのに、冒頭からは何の緊張感も伝わってこない。これはどうしたことだろう？とその時点で訝しく思ってしまうのだが、意図的につくられたものであることがストーリーを追っていくうちに理解できる。

話の中では、この頃、赤穂浪士を主題とした狂言が流行っており、その創作されたストーリーが人気を博してしまった為に、仕方なくそれに合わせて討ち入りに行くことにした、という筋書きとなっている。

このような題材をある種の喜劇に仕立てあげるのはとても興味深く、結末がわかっているだけに観客も自然とストーリーを追いやすくなる。そこにどのような落としどころを持っていくか、ということが大切になってくるが、今回の作品では、全てが狂言を取り仕切る人間の思惑の中で赤穂浪士すらも動かされる、というところが主となる。

これだけの歴史的事件を取り扱おうとする試みは覚悟も必要となるだろうが、それを落とし込んだ作家の心意気を称賛したい。しかし敢えて言うとすれば、話の中での笑いの小ネタが小ネタにしかなっていなかったのが残念ではあった。もし観客がくすっ、と来る瞬間を作るとするならばそれはネタではなく、その中に生きる人間の滑稽として見せるべきだろう。　　スタジオソルト　山ノ井史

神奈川県演劇連盟加盟団体（５０音順）

●演劇プロデュース『螺旋階段』●京浜協同劇団●劇団蒼い群●劇団河童座●劇団かに座
●劇団川崎演劇塾●劇団こゆるぎ座●劇団やぶさか●劇団よこはま壱座●スタジオソルト●ナオサク企画●虹の素
●まりこ☆みゅーじあむ●ミュージカルプロジェクト・M・ピンク●ヨコスカ・ベアフットシアター●横浜小劇場

神奈川県演劇連盟ＨＰ：http://kenenren.org/

ＤＲＡＭＡかながわ[別冊５号]　　発行日:２０１６年４月３０日　　発行：神奈川県演劇連盟
編集：緑慎一郎（演劇プロデュース『螺旋階段』）・浅水真子（劇団やぶさか）・海老名信吾（劇団よこはま壱座）・関口素実・山元洋一（外部協力）